

---

# 銀魂 一私と桜と真選組！一

李

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

銀魂 一私と桜と真選組！ー

### 【Nコード】

N9992X

### 【作者名】

李

### 【あらすじ】

真選組を訪ねてきた少女、天王寺ルナ（てんのうじ るな）は、近藤や、土方、沖田、そしてその姉ミツバの幼なじみだった。沖田たちも知らないルナの過去に万事屋、坂田銀時も関係していた――！？他にも家出少年の入隊とか、寺門通一日局長とか。シリアスあり、ギャグあり、恋あり、桜とともに成長する少女の生き様、ご覧あれ！

## 第零話 プロローグ（前書き）

初めまして！李といいます。

この小説は、銀魂にオリキャラを投入したお話です。どちらかというと、真選組メインになってます！けど、万事屋も出てきます^^  
駄文かもしれませんが、どうかお付き合いください><  
それでは、「銀魂 一私と桜と真選組！」始まりです！

## 第零話 プロローグ

「ねえ、るーちゃん。」

「なあに？」

「僕ね。大きくなったらもつと強くなって、るーちゃんを守る！」

「本当？じゃあ、ずっと一緒にいてくれるー？」

「うんっ！大きくなったら、あいつも倒して、四人で暮らすんだ！」

「えー？みんなで暮らしましょうよ！……でも、本当に一緒にいてくれる？」

「本当だよ。じゃあ約束しよっ！」

「うん！」――――。

二人でわらいながら、指きりをした。

私は今でも覚えてる。

あなたは覚えていますか？

私と過ごした日々のこと。あの時のこと。約束。

会いたい。あの人に、あなたに。

## 第一話 私と再会とバズーカ（前書き）

本格的に話を進めて行きたいと思います！

あの人達が出てきます＜＜

## 第一話 私と再会とバズーカ

「どこだっけ……？」

まだ日が昇り始めてまもない早朝。人気の少ない道を、フラフラと歩く少女が一人。栗色の髪を左側で高く結び、瑠璃色の瞳をした少女――。路地に入っては出て、右の道へ行っては戻り、左の道へいったりと……どこからどう見ても迷っていた。

「あれ。ここか。」

ようやく少女は、一つの建物――――真選組屯所の前で立ち止まった。門の目の前まで歩いて行くと手で、門を軽くたたく。

「すみませーん！誰かいませんか？ってか、開けて下さーい！」

早朝にもかかわらず大声を張り上げる少女だったが、誰も出てこないどころか、返事すら聞こえない。

「あれ……誰もいないのかへドオオオオオン！>

その直後、少女の目の前から門は消えた。門の代わりに煙が立ちのぼり、やがてその中から人影が現れた。

「オイ総悟！お前何やってんだ！門壊れちゃったじゃねえか！」

中から現れたのは黒髪無造作ヘアに鋭い目つきの男――真選組副長土方十四郎だった。そして、また別の影が現れる。

「あーあ。こりゃまた派手にやっちゃいましたねィ。土方さん。」

次に現れたのは肩にバズーカを担いだ、亜麻色の髪に蘇芳色の目の真選組一番隊隊長沖田総悟。涼しい顔をしていたが、肩に担いだバズーカからは、煙が上がっていた。

「何俺のせいにしてるんだよ！テメーがやったんだろ！？」

「いや、俺は土方さんに向けて打ったんですぜ。土方さんに当たってれば門は壊れなかったじゃないですか。」

「ふざけてんのかテメエエ！」

土方が刀を取り出し、まだ涼しい顔をしている沖田に向ける。そして沖田も再びバズーカを構える。そんな中、少女は二人を見ながら目を輝かせていた。

「だいたいな、お前まだ……」

「十四郎さん！そーちゃんっ！」

今まで黙っていた少女が急に弾むように言ったので二人は少女の方を向く。二人はケンカをやめ、少女の方をじっと見つめる。

「ルナ……？」

「うんっ！」



少女――――天王寺ルナは笑顔でうなずいた。

てんのうじ

## 第一話 私と再会とバズーカ（後書き）

読んで下さり、ありがとうございました！

さあ！これからどうするかな……；

## 第二話 私とジミーと屯所探検

ルナは、嬉しそうに微笑みながら二人と一緒に屯所内を歩いていた。

「マジかよ……お前、本当にルナか？」

「何度も言ってるじゃん。ルナだよ。ルナ！……もしかして、私の事、忘れちゃった……？」

「んな事あねえけどよ……！」

「まあそんな事いいじゃないですか。久しぶりの再会なんですよ？　るーちゃんとは。」

この少女ルナは、真選組結成前——土方達がまだ武州にいた頃の知り合いであった。なぜ、久しぶりなのか、それは土方達が江戸に上京した後、親戚に引き取られたからであった。

「そーちゃん、近藤さんは元気？」

「元気ですぜ。元気すぎて、逮捕されそうになるくらいでイ」

「そっかー風邪とかで寝込んだ事ないもんね！　そーちゃんは？　ちゃんとご飯食べてる？」

「もちろんでさあ」

どっかの母親が言いそうなセリフだな、と土方が呆れているなか、

沖田は嬉しそうにルナと話を続ける。

「あっちの方、土方さんの部屋なんでムシャクシャしたらあっちに向けて、バズーカ打つとストレス発散できるから、ルナもやってみたら……」

「するんじゃないねえ！」

「そーちゃんは変わらないねー」

「それから、あっちの池には鯉がいるんでイラついたら石投げ……」

「オメーはどこでストレス発散してんだよ！道理で鯉が少なくなっと思った！近藤さん泣いてたもん！」

沖田に、屯所内を説明されながら、きよろきよろと周りを見回すルナの目にふとバトミントンのラケットを持った土方達とは少し違う隊服を着た男が映った。男は、ルナ達に気付くと軽く会釈をして、近付いて来た。

「副長、隊長、おはようございます！えっと……そちらの方は……？」

「あ、初めまして。天王寺ルナといいます。」

「こちらこそ始めまして。真選組監察の山崎退です。」

ルナが頭を下げ、山崎も頭を下げる。

「言っておくが山崎。るーちゃんは、武州にいた頃からの幼なじみ

でイ。ふざけたマネしやがったら、どうなるかわかってんだろぅな？」

「ハイハイ。何もしませんって！…でも、へえ〜武州に居た頃から…ってえええええ！？幼なじみ！？って事はミツ…。」

言葉の続きを喋ろうとした山崎は、隣にいた沖田のただならぬ殺気を感じ、息をのんだ。

「どうしたんです？山崎<sup>ジミー</sup>さん」

「何でも…ってあれ？今、地味って言った？ジミーって言った？俺、地味って言ったけ！？」

「普通わかるだろ。お前が地味な事くらい。」

「そうですよ〜ジミーさんが近づいて来なかったら、私わかりませんでしたもん。」

「副長！？ルナさん！？酷すぎでしょ！普通わかるとか、ルナさんに至っては初対面だよな？さっきまで山崎と書いてジミーだったのに、もうそのまんまジミーさんじゃん！」

そんななか、楽しそうに笑っているルナを悲しそうな目で見つめている人物——沖田がいた。悲しそうと 言うよりは、心配そうな、そわそわとした様子で……。

そんな沖田を、土方は見逃さなかった。



## 第二話 私とジミーと屯所探検（後書き）

局長さしおいて先に出ちやつたよザキ…ハハ..  
..

次は出てくるかな…近藤さん；

### 第三話 私とゴリラと信頼できる人たち（前書き）

本日は、銀魂42巻発売日ですね^^！

表紙は、今井信女ちゃんと佐々木異三郎さんだそうです！

ジャンプで読んだ時にも二人が出てくる話の土方さんがカッコ良  
くって…！

二人もカッコ良かったです！買いに行かなければ！

今回の話は、前回先を越されてしまったゴリ…局長がです！



### 第三話 私とゴリラと信頼できる人たち

局長室。襖の前に立ち、近藤さん入るぞ、と声をかけると、ああ、と声が返って来た。襖を開ける。土方が入るのに続いて沖田も部屋に入った。

「おお。トシと総悟か。どうしたんだ？」

座布団にどっかりと座り、二カつと白い歯を見せて笑うゴリラが：ではなくこの男、真選組局長、近藤勲である。仕事をしていたのか、机には写真やら資料やらが置いてあった。

「近藤さん。客人でさア。るーちゃん、こっちこっち。」

「近藤さんっ！お久しぶりです！」

沖田に手招きされ、ルナは、近藤の前に立ち深々と頭を下げる。近藤は、驚いた顔をしていたが、おお！と声をあげた。

「ルナか！！久しぶりだな～！何年ぶりだったかな、大きくなったなあ。」

「近藤さんもよりゴリ…いや、男前になっちゃって～」

気のせいか、涙目になっている近藤がルナを見上げて笑う。ルナも苦笑いした。

「どうしたんだ？急にこんな所に来て……」

「それは、その……」

「？」

近藤に尋ねられて、言いにくそうに口ごもるルナを見て、土方が口を開く。

「近藤さん、ルナについてお互いに聞きたい事もあるだろう。少し話さないか？」

「ああ。いいぞ。」

土方が真剣な顔をして言ったので、沖田や、近藤もきちんと向き合う。

数秒の沈黙が流れた後、初めに口を開いたのは土方だった。

「まずルナ。お前は、親戚に引き取られたはずだったよな？」

「ハイ。」

「……じゃあ、今までどこに居たんだ？あと、なんでここに来た？」

「どこって……親戚の家に居たんですよ。それに、会いたかったからここに來たんです。」

「なんで、刀を持っている？」

「この刀は、昔も今も肌身離さず持ってるだけですよ。」

また、沈黙が流れる。土方は、ため息をついた。

「ウソだな。」

土方はキツパリと言う。近藤や沖田も、お見通しとでも言うように、大きく頷いた。

「あはは…やっぱり、ばれちゃったか……！」

「ばれちゃったじゃねえよ。俺達みたいな仲で、ウソをつく必要なんて無いだろ？」

土方に言われ、ルナは、俯く。

「何ですかィ…？何でウソなんてついたんでィ、ルナ。」

「今更、驚く事なんざねえよ。知り合いに引き取られたお前が、こんな所に来た時点で驚いてんだからよ。」

「そうだぞ。言いにくいことでもなんでも、俺たちは気にしないさ。」

まるでルナの言いたいことがわかっている様に優しく声をかける。

「ごめんね。やっぱり、みんなには敵わないね。」

言わなきゃ……。

「隠してるとかそんなつもりは無かったんだけど……あのね。」

不安そうな顔をしたが、やがて決意を決めたように口を開いた。

「私は——……」

「鬼兵隊に居たの……!」



**第三話 私とゴリラと信頼できる人たち（後書き）**

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9992x/>

---

銀魂 ー私と桜と真選組！ー

2011年11月4日09時17分発行